

島根県旧出雲郡（現斐川町）の地籍図

—— 広島大学附属図書館蔵「中国五県広島国税局寄贈土地租税資料文庫」と
斐川町役場所蔵の資料を中心に——

桑 原 公 徳
礪 永 和 貴

はじめに

地籍図は、近代国家を目指す明治政府が国の基本的な財源である租税を公正に徴収することを目的に国土の土地状況を悉皆調査し作製した行政的絵図である。このため、土地区画の最小地筆の状態をほぼ全国にわたって覆う大縮尺の絵図であり、歴史地理学をはじめ土地を対象とする研究にとって地域の景観を詳しく知ることができる重要なものと考えられる。さらに、地籍図は絵図と地図の中間にあつて、美術的にもすぐれたものが多く、ビジュアルに視覚へ訴える資料として文化財的価値も高い。京都府向日市などでは、地籍図が市指定の文化財となっている。また、市町村史・誌の類には、地籍図が資料として掲載されたり、地籍図の資料集が刊行されているところもある。さらには、博物館などにおいて展示される機会も増えてきた。

しかし、一方で地籍図のおかれている一般的な現状をみると、その多くが市役所・町村役場の倉庫の片隅に埋もれ、

ややもすれば廃棄処分される危険性がある。地籍図が役場の建て替えや町村合併によって失われたことも多い。今のうちに調査しておかないと、貴重な地籍図が知られなままに見棄てられていく可能性が高く、調査研究の緊急的な要素が極めて強いと言わざるを得ない。

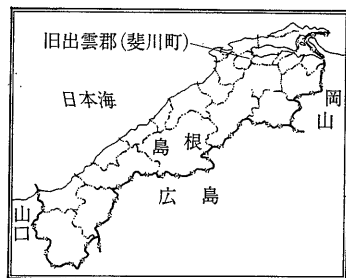
本研究は、こうした地籍図がおかれている状況を憂い、昭和六〇年に桑原が広島大学附属図書館に所蔵される「広島国税局寄贈^{中国土}地租税資料文庫」(以下「広大資料」と略)において旧島根県域の地籍図が大量に所蔵されていることを確認したことに始まる。本稿はそれ以来、多くの研究者と関係諸機関の協力を得て、継続的に進めてきた島根県における地籍図そのものを対象にした研究の一齣である。

以下本論では、旧出雲郡(しゅつとうぐん)に当たる現斐川町の地籍図について、今までの研究法を踏襲し、その保存状況や様式の特徴を検討したい。

一、地籍図の保存状況

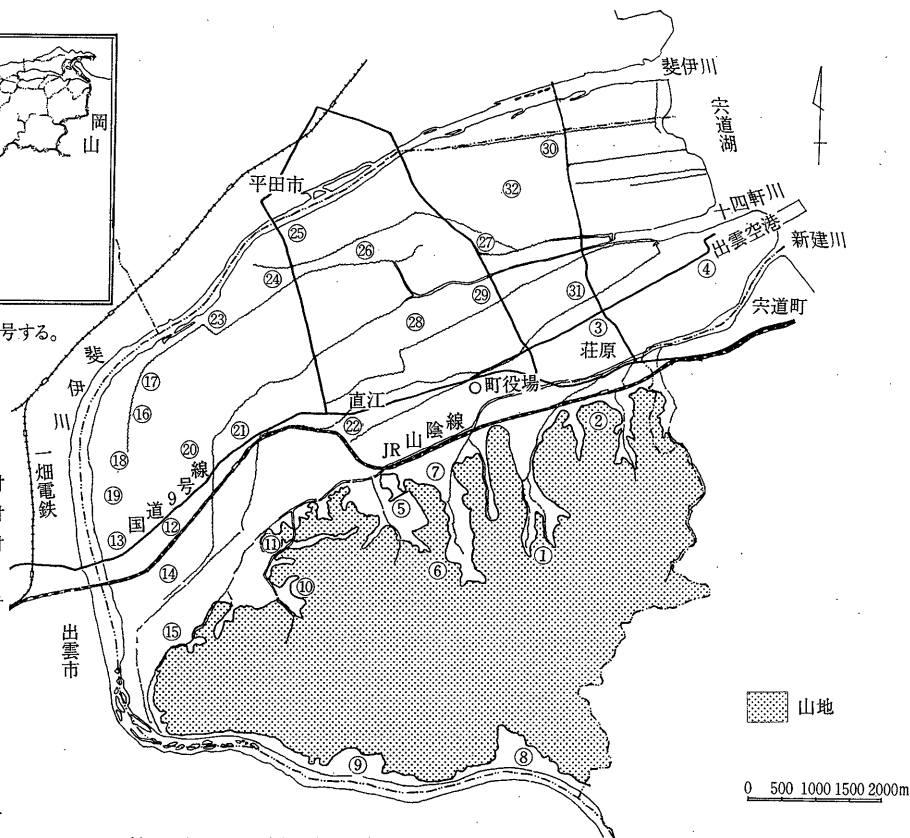
地籍図は現在もなお不動産登記などに関連して、旧公図として閲覧や利用に供されている。そのため一般的な所蔵機関は、市役所・町村役場の税務課や地方法務局出張所である。ちなみに、こうした機関で地籍図は、「旧公図」と呼ばれている場合が多く、交渉や閲覧する場合にはこの方が通じやすい。この他に使用されなくなったものについては、役場の永年保存文書として保管されたり、博物館、区有あるいは戸・区長を務めた旧家の個人所蔵のものなどが考えられる。

旧出雲郡は、第1図のように現在の島根県斐川町域と一致する。このことから地籍図は、斐川町役場や所轄の地方法務局に所蔵されていることが予測される。また、広大資料にも所蔵されていることが従前の調査によってわかってきた。広大資料の地籍図は、当時の島根県に提出された正式な差出図で、中国地方を管轄する広島国税局に管理され、



※①～③②は、図の番号に符号する。

- | | |
|---------|---------|
| ① 宇屋神庭村 | ①⑦ 鳥屋村 |
| ② 学頭村 | ①⑧ 別名村 |
| ③ 上荘原村 | ①⑨ 北島村 |
| ④ 下荘原村 | ②⑩ 富村 |
| ⑤ 吉成村 | ②⑪ 上直江村 |
| ⑥ 式部村 | ②⑫ 下直江村 |
| ⑦ 羽根村 | ②⑬ 今在家村 |
| ⑧ 上阿宮村 | ②⑭ 中原村 |
| ⑨ 下阿宮村 | ②⑮ 上鹿塚村 |
| ⑩ 氷室村 | ②⑯ 福富村 |
| ⑪ 神守村 | ②⑰ 黒目村 |
| ⑫ 千家村 | ②⑱ 南村 |
| ⑬ 神立村 | ②⑲ 中州村 |
| ⑭ 求院村 | ③⑰ 坂田村 |
| ⑮ 出西村 | ③⑱ 沖州村 |
| ⑯ 井上村 | ③⑲ 三分市村 |



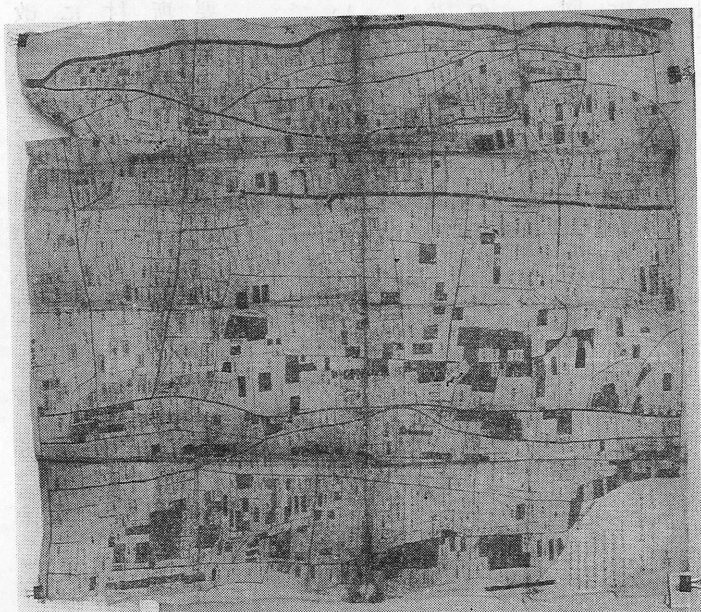
第1図 旧出雲郡(斐川町)の位置と村の配置

その後広島大学に寄贈されたものである。ここには旧島根県下の明治六年の壬申地券に伴う村全体を描いた壬申地券地引絵図（以下「壬申図」と略）、明治八年の地租改正に伴う耕宅地を描いた地租改正耕宅地地引絵図（以下「改租耕宅図」と略）と山林原野を描いた地租改正山林原野地引絵図（以下「改租山野図」と略）のほとんどのものが所蔵されているので、まずこちらの方から調査することにした。

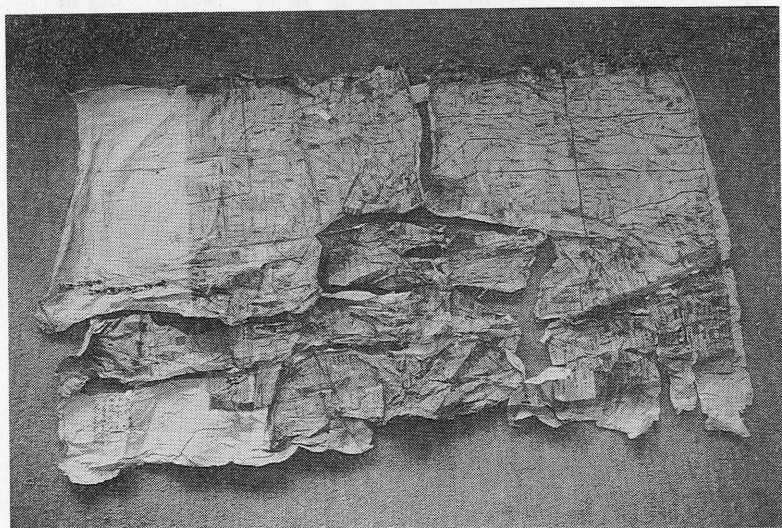
また、斐川町における調査では、広島大学の地籍図と比較することを目的に、地元に残された壬申図と改租耕宅図・改租山野図を捜し出して検討することにした。旧出雲郡を対象としたのは、郡域が斐川町に一致したことと地籍図作製に当時の郡役所が「郡中惣代」などを通して統括していたと考えられるからである。また、「区」の範囲も地籍図作製に影響を与えているとみられる。

地方法務局や役場の税務課には、一般に明治二二年の土地台帳付属地図が旧公図として閲覧に供されているが、両所の地籍図は同種である場合が多い。しかし、壬申図や改租図は、役場の永年保存文書として総務課（斐川町の例）や管理課（木次町）、図書館（大東町、出雲市）、資料館（伯太町）などに保管されていることがほとんどである。そのため、地方法務局は調査対象から外し、教育委員会を通じて役場の税務課や総務課、管理課などに旧地籍図の所蔵の有無を確かめ、特に永年保存文書を閲覧することにした。おおよそ各地方においても同様の所蔵状況である場合が多いので、所在調査は以上の諸機関にあたるべきであると思う。

斐川町の場合税務課には、明治二二年の土地台帳付属地図が保管され、旧公図として機能していたものの、壬申図や改租図の存在は確認できなかった。また、職員にもこうした明治初年の地籍図についての所在は知られていなかった。これまでの我々の経験からして一般に職員ですら古い地籍図の所在や価値を認識されていないので、役場の永年保存文書を探索する必要がある、また一方ではその行為が地籍図の文化財的な価値を啓蒙する絶好の機会となる。そこで、教育委員会や総務課で所在を確認した結果、写真1の絵図のような永年保存文書類は総務課の管理で、教育委



福富村壬申地券地引絵図



原鹿村地租改正耕宅地地引絵図
写真1 斐川町資料の保存状況

員会が管轄する郷土資料コーナーに保管されていることがわかった。この際の永年保存文書の保管場所は、一筆丈量図や測量図、旧土地台帳、道路地図などの所在を聞いたことによって判明した。しかし、我々が目的とした壬申図や改租図などの所在は不明であった。漸く実際の保管場所で探索することによって確認することができた。郷土資料室に保管されてからは、目録や保存措置もされないままに放置されてきたといつてよい。こうした現況は、どこの市町村においてもほぼ同様である。従って、実際に役場の永年保存文書を閲覧し、そこで見つけたすしか手立てはない。所在確認をしない限り、壬申図や改租図はそのまま放置され続けるものと考えられ、そこに本調査の意義と発見の重要性が指摘できる。

以上のような所在調査によって、広島大学と斐川町役場で確認できた絵図とその保存状況を示したものが、第1表である。この表には行政区画の変遷も示し、絵図の番号は第1図に記した村の番号や第2・3表の番号にも対応している。

広大資料の地籍図は、旧出雲郡のほとんどの村のものがある。地租改正時の明治八年にいくつかの村が合併したため、その合併範囲で図が作製されている。また、改租山野図が少ないのは、本郡が出雲平野にあって平地が広く山野の所在を示す必要がなかったからである。

保存状況は極めて悪い。特に壬申図は、今までの調査を行なった地域の中で最も劣悪である。改租耕宅図・同山野図の保存状況も最下位に位置する。特に、水を被ったように考えられる展開不能の状態の絵図が多く、まったく利用に供する状態ではないものがみられる。

斐川町の地籍図は、前述のように税務課と教育委員会に保管されている。税務課には後の複製もあるが地押更正地図がすべて所蔵され、現在も一般の利用に供されている。教育委員会保管の地籍図は、第五一区と第五二区のものしか残存していない。この両区の一部は明治二三年に合併して、明治行政村の久木村と出東村になった。その後昭和三

第1表 「廣大資料」と「斐川町資料」の地籍図保存状況

区	村名	壬申		M8合併	地租改正					M22合併	地押			
		広	斐		耕地	山地	山野	道路	水路		斐	税		
第四九区	1 宇屋神庭村	④			②		②			莊原村		②		
	2 学頭村	⑤			⑤		⑥					②		
	3 上莊原村	④			⑥							③		
	4 下莊原村1	④			②		①					③		
	下莊原村2	④			②									
	下莊原村3	④			②									
	5 吉成村	①		三纏村										
	6 式部村	④			⑥							②		
	7 羽根村													
第五〇区	8 上阿宮村	①		阿宮村	②					出西村		②		
	9 下阿宮村	④												
	10 氷室村	⑥		神氷村	⑥							②		
	11 神守村	⑥												
	12 千家村	④		併村								③		
	13 神立村	①										②		
	14 求院村1	⑤			③									
	求院村2				①									
	15 出西村	③			⑤		⑤					③		
	16 井上村	③		鼻井村	④						伊波野村		②	
17 鳥屋村	③													
18 別名村	⑤		名島村	③						②				
19 北島村														
20 富村	③			③						③				
第五一区	21 上直江村	④		直江村						直江村				
	22 下直江村1	②			⑥		①					②		
	下直江村2	②			③									
	下直江村3	③												
第五二区	23 今庄家村	④			③	⑤				久木村	②	③		
	24 中原村	①		原鹿村	④	⑤						③	②	
	25 上鹿塚村	①										③	④	
	26 福富村	①	⑤		⑥							②	②	
	27 黒目村1	④			②							⑤	③	
	黒目村2				②							③	③	
	28 黒南村		⑤		⑤									
	29 中州村1	⑤			④				②					
	中州村2	③			②									
	30 坂田村	④			③			③	②		出東村	③	②	
	31 沖州市村	④			②				②				②	②
	32 三分市村	④			④								②	②

注1：村名の番号は第1図に対応し、村名の後に付す番号は分図を示す。

注2：「広」は「廣大資料」，「斐」は「斐川町資料」，「税」は「斐川町税務課」を示している。

注3：町・広の番号は，①良好，②若干摩滅，③一部破損，④分離，⑤破損，⑥展開不能，「無記名」は現存しないを示す。

○年に斐川町に合併するまで、村役場が所在して機能してきた。その久木村と出東村役場に所蔵されてきた文書に含まれた地籍図がそのまま斐川町役場に移管されたものと考えられる。このことを示すように、一筆丈量図や土地台帳なども両村のものが残されている。こうした、行政区画を単位にして地籍図が現存するケースを伯太町の調査でも知ったが、町村合併に伴う町村役場資料の移管のありようで地籍図の現存する地域に偏りがみられる。役場の文書は、その所在していた区において現在も保管されていることが多いので、今後所在が確認できない場合は、こうした地元において探索することが望まれる。

この他に地租改正の時に作製された道路図と水路図がみられる。今までも同種の図が他の郡においても確認されたが、今回の調査で「本支兩道及ヒ用悪水路村作道等ノ帳籍及ヒ繪図面編製進達ノ儀」の更正雛型によって、地租改正に際して道路・水路絵図を作製したことが確認できた。

さらに今在家村の改租図は小字毎の切絵図であることが興味深い。これまでの調査では、一筆丈量図と一村全図しかみられなかった。しかし、本郡においては一筆丈量図からこうした小字毎の切絵図を作製し、それを編集して一村全図に調製されたようである。

本郡の小字は、今までの山間部における小字の狭小で錯綜する有り様とは異なっており、比較的広くてまとまっている。こうして、小字の地域性が地籍図の作製方法と絵図の形態に影響を与えたことが考えられる。

以上のように斐川町資料では、さまざまな種類の地籍図とそれに関連する絵図や史料を見出したが、最も貴重な壬申図や改租図の保存状況は極めて悪い。広大資料の地籍図も含めて早急な保存処置をこうじる必要とともに、緊急的な本調査の意義が認められるものと考ええる。

二、様式の統一性

地租改正をめぐる研究は、多様な意見がみられるが、最も根幹的な問題は近代性格か半封建的なものかに絞られるであろう。地籍図は、近世村絵図にみられるような絵画的描写による精度の低いものから、統一的な様式で精度の高いものまで玉石混淆であり、先の地租改正をめぐる課題を史料として具現化していると思われる。ところが、今までの研究は、地籍図そのものに関しては作製技術が低いとしてあまり検討されてはいない。しかし、製作技術が低かったとしても、実際に地籍図を検討すると様式や精度の地域的な格差や時系列的な発展段階、提出先機関の性格による様式の不統一性などがあり、これらを明らかにする必要がある⁽³⁾。またそれが、歴史地理学的な地籍図研究の一つの視点と思われる。

一一・一二頁の第2表と第3表は、以上の問題を出雲郡を例として具体的に検討するために作成した壬申図と改租耕宅図、同山野図の名称、凡例、小字、地番などの様式一覧である。これによって出雲郡における地籍図の種類毎の特徴を述べていくこととする。

(一) 壬申図

名称は広大資料、斐川町資料とともに「村」、「村絵図面」とされたものが多く、壬申図を特徴づけるものはない。しかし、広大資料の下庄原村のものは「反新田絵図」と「本田絵図」に二枚に分割されていることが目を引く。本郡は、出雲平野の宍道湖湖畔にあつて新田開発が盛んであった。主に斐伊川が運ぶ土砂堆積を利用した干拓開発であり、その開発段階に従つて耕地がおおよそ次の四段階に区分けされている⁽⁴⁾。

第一段階は「水代」と呼ばれる水面と土地である。これは、宍道湖の沖に柵などを設置し、斐伊川の土砂堆積を促進し、これによって自然陸化した土地、もしくは陸化しそうな湖上の範囲をいう。陸化した部分は、まだ耕地とはな

っていない。地籍図では、沿岸及び湖上に地筆のみが描かれている。

第二段階は「反新田」と呼ばれる耕地である。ただし耕地といっても「反」、すなわち面積が確定した段階の新田を指し、区画や所有者もほぼ決まって一部で耕作が行なわれるが、年貢を完納するまでに至っていない土地を指している。先の下荘原の「反新田絵図」はこれに該当する部分を描いたものである。

第三段階は「石新田」と呼ばれる耕地である。「石」、すなわち年貢が付加される新田をさす。一般の耕地と同じであるが、新田である点から次の本田とは区別される。

第四段階は「本田」と呼ばれる耕地である。これは、新田ではなく従来より耕地として営まれてきた。新田に対する本田の意味で、下荘原の「本田絵図」はその範囲を描いたものである。

こうした地域の特色ある開発や土地利用が地籍図に描かれ、図の名称として採用している点は注目される。また、出雲平野の開発過程やその範囲を検討する上で重要な資料となろう。

凡例は、文字で描かれているものが多い。広大資料の宇屋神庭村における例を示すと次の通りである。

黄色田地、茶畑、白社寺、鼠郷蔵敷・税外墓地、浅黄川、萌黄山地、朱道、薄赤人家、

(点線で四角の印) 墓地墓印

ここにあらわれた地目は、どの壬申図においても同じ色に着色され、凡例も似ている。また、地租改正の時にいくつかの村が合併するが、これらの合併する村においては凡例の様式がほぼ一致している。これは、仁多郡や能義郡においても同様の事例がみられるが、すでに合併の事前段階で、壬申図の作製が合併の範囲で同じ作製者によったものと考えられる。これまでの調査においても同じ結果を得ているので、壬申図の作製に当たって何らかの作製に関する基準が旧島根県下全域に指示されたと思われる。

斐川町資料における壬申図の凡例は、南村のものが文字であり、福富村のものにはない。広大資料には南村は残存

第2表 壬申図の様式

区	村 名	合併村	名称		凡例 様式	数	小字 (1)(2)
			外	内			
第四区	1 宇屋神庭村		A	A	イ	9	I b
	2 学 頭 村		A	B	イ	6	I b
	3 上 庄 原 村		C	A	ウ	8	I b
	4 下 庄 原 村 1		E	A	ウ	10	Ⅲb
	下 庄 原 村 2		F	A	ウ	7	Ⅲb
	5 吉 成 村	三 纏 村	B	A	イ	9	I b
	6 武 部 村		B	A	イ	9	I b
	7 羽 根 村		現存しない				
	8 上 阿 宮 村	阿宮村	A	A	イ	7	I b
第五区	9 下 阿 宮 村	阿宮村	A	A	イ	7	I b
	10 氷 室 村	神水村	展開不能				
	11 神 守 村		展開不能				
	12 千 家 村	餅川村	A	D	イ	8	Ⅱb
	13 神 立 村		A	D	イ	8	Ⅱb
	14 求 院 村 1		A	A	イ	8	I b
	15 出 西 村		A	A	ウ	9	I b
	16 井 上 村	鳥井村	A	A	イ	7	Ⅲb
	17 鳥 屋 村		A	A	イ	7	Ⅲb
	18 別 名 村	名島村	D	A	ア	0	I b
	19 北 島 村		現存しない				
	20 富 村		A	A	ウ	9	I b

区	村 名	合併村	名称		凡例 様式	数	小字 (1)(2)
			外	内			
第五区	21 上 直 江 村	直江村	D	D	イ	8	I b
	22 下直江村 1		D	D	イ	8	I b
	下直江村 2		D	D	ア	0	I c
	下直江村 3		D	D	ア	0	I c
	23 今 庄 家 村		A	A	イ	8	I b
第五区	24 中 原 村	原鹿村	A	A	イ	7	Ⅲb
	25 上 鹿 塚 村		A	A	イ	7	Ⅲb
	26 福富村：広		A	A	イ	8	I b
	26 福富村：斐		A	A	ア	0	I b
	27 黒 目 村 1		D	A	イ	8	I b
	28 南 村：斐		A	A	イ	7	Ⅱb
	29 中 州 村 1		B	A	イ	8	I b
	中 州 村 2		A	A	ア	0	I c
	30 坂 田 村		A	A	イ	4	Ⅲb
	31 沖 州 村		A	A	ウ	12	Ⅱb
	32 三 分 市 村		A	A	イ	6	I b

注1：村名の番号は第1図の村番号と第1表の絵図番号に符合し、村名に続く番号は分図を、村名に続く「：広」は広大資料、「：斐」は斐川町資料を示す。

注2：名称のAは「村」、Bは「図面」、Dは「本田絵図画」、Fは「石反新田絵図」を示す。

注3：凡例の様式のアは「凡例なし」、イは「色・地目も文字」、ウは「丸枠に彩色の地目を文字」を示す。

注4：小字(1)のⅠは「地目毎の通し番号」、Ⅱは「一村通し番号」、Ⅲは「本田、石新田、反新田毎の通し番号」を示す。

注5：小字(2)のaは「各一筆内に記載」、bは「絵図の余白に書き出す」、cは「分図をまとめて記載」を示す。

第3表 改租図の様式

I. 耕宅図

(耕宅図のつづき)

	村 名	名称		凡例		小字
		外	内	数	様式	
第四区	字屋神庭村	A	A	0	ア	I b
	学 頭 村	A	H	0	ア	I a
	上 庄 原 村	展開不能				
	下 庄 原 村 1	B	B	5	ウ	I b
	下 庄 原 村 2	B	B	0	ア	I c
	下 庄 原 村 3	B	B	0	ア	I c
	三 纏 村	展開不能				
第五区	阿 宮 村	A	G	0	ア	I b
	氷 室 村	展開不能				
	併 川 村	存在せず				
	求 院 村 1	D	G	4	エ	I b
	求 院 村 2	C	A	5	エ	I c
	出 西 村	A	A	7	ウ	I a
	鳥 井 村	A	G	5	エ	I a
第五区	名 島 村	E	A	6	エ	I a
	富 村	E	A	6	エ	I a
	直 江 村 1	展開不能				
	直 江 村 2	A	G	7	ウ	I a
	今在家村：広	A	A	6	ウ	I b
	今在家村：斐	A	A	6	ウ	I b
	原鹿村：広	A	A	7	ウ	I b
第五区	原鹿村：斐	A	I	7	ウ	I b

	村 名	名称		凡例	小字	
		外	内	数 様式	(1)(2)	
第五区	福 富 村	展開不能				
	黒 目 村 1	A	A	5 イ	I b	
	黒 目 村 2	A	A	0 ア	I c	
	南 村	A	A	7 ウ	I b	
	中 州 村 1	B	H	9 イ	I b	
	中 州 村 2	B	H	5 エ	I b	
	坂 田 村	B	H	0 ア	I a	
	沖 州 村	B	A	9 ウ	I b	
	三 分 市 村	F	H	0 ア	I a	

II. 山野図

	村 名	名 称		凡 例	
		外	内	数	様式
第四区	字屋神庭村	A	A	0	ア
	学 頭 村	展開不能			
	下 庄 原 村	H	H	0	ア
50	出 西 村	H	H	0	ア
51	直 江 村	B	G	5	ウ

注1：名称のAは「村」、Bは「絵図面」、Cは「石新田」、Dは「本田図面」、Eは「耕宅」、Fは「地引絵図面」、Gは「地引図面」、Hは「山林絵図面」、Iは「控」、Hは「名称なし」を示す。

注2：凡例の様式のAは「凡例なし」、イは「色・地目も文字」、ウは「丸枠に彩色の地目を文字」、エ「四角枠に彩色の地目を文字」を示す。

注3：小字(1)Iは「一村通し番号」を示す。

注4：小字(2)aは「各一筆内に記載」、bは「絵図の余白に書き出す」、cは「分図をまとめて記載」を示す。

せず、福富村のものには凡例がない。しかし、文字の凡例は廣大資料の特徴と一致し、凡例や絵図に描かれた地目の彩色は同じである。

このように統一的な凡例と地目の着色ではあるが、なかには前述した開発を示すものの他にも地域性をあらわす例がある。廣大資料の上荘原、下直江、神立、富、中州、黒目村の「石地」（宇屋神庭の「墓地墓印」と同じ印）、坂田村の「流作場」（灰色の着色）がそれにあたる。これら「石地」や「流作場」の凡例がみられる地域は、かつての斐伊川が流れていた旧流路にあたり、地域的地目を示している。この他に中州村の凡例は二つに分かれ、後半は「石反新田畑類訳」として、「本畑、間石畑、畑成、屋敷」が凡例としてあげられている。これらの地目は、近世の年貢や土地分類を意識したものと考えられるが、同図の神社は近世の村絵図にみられるような絵画的な描写となっている。この図は、壬申図が近世的な絵図の要素を多分に持っていることを示した好例であろう。

このように、様々な凡例に示される地目の有り様は、前述した当地域における新田開発に伴う土地区分にも関連して興味深いものであり、今後の地域研究における課題となる。

小字は絵図の余白に「地目が何でその地番の何番から何番までは小字何」とその関係を書き出している。保存状況を検討した際にも述べたところであるが、これまでの山間地における小字の範囲は狭小で錯綜していたが、本郡の小字は平野に位置するためにまとまった配置がみられる。こうしたことから、山間地では絵図の一筆毎に小字が書き込まれるのが一般的であったが、本郡は上述したように地番と小字の関係を示す方法がとられている。また、斐川町資料の福富村は、絵図余白に小字の一覧がないが、凡例もみられないので完成図ではなく、下図に類するものと考えられる。

地番は一筆毎に書き込まれ、前述したように小字との関係を絵図の余白に書き出されている。壬申図では地番は地目毎の通し番号の様式で書かれたことが、文献史料より確認できる。しかし、本郡では改租図で様式化される一村通

し番号や本田、石新田、反新田毎の通し番号のものもあり不統一である。こうした、地番の不統一な様式は前述したような小字を余白に書き出す表現や、平地が広い地域的特色に關係があるように思われる。その他、地目毎の通し番号によって知られる地目に「櫛畑」がある。

壬申図の土地利用については、様々な地域毎の特色が採用されたことを示している。また、凡例にない地目の表現方法は、各地域の特色ある土地利用を示している場合が多いように思われる。

(二) 改租図

名称は一部に図の種類を示すものがみられる。耕宅図より山野図の方が「山林絵図面」などと種類を的確に表現するものが多い。これらの名称は、耕宅図と山野図を区別して作製したので、それらを分けるためのものである。また、耕宅図、山野図ともにみられる「地引絵図」の名称や斐川町資料の原鹿村耕宅図の「控」などの表現はその種類を示し、近代的な図への脱皮過程を示しているものと思われる。しかし一方では、求院村のように「本田図面」と「石新田」の名称がみられ、本田と新田を区別し、当地域の特色を示す地目を意識した絵図もあって壬申図の様式を受け継いでいる。

凡例の様式は、耕宅図において区毎にかなりの特色がみられる。第四九区では凡例がないものが、第五〇区では凡例の色記号を四角に縁取って色を示すものが、第五一区では色記号の縁は丸が多い。第五二区はあまり特色がない。また、壬申図にみられた凡例の色と地目を文字で示す様式のもののみがみられる。これらは、壬申図の影響を受けたことを示す一方で、同図を参照しながら改租図が作製されたことを示している。さらに、原鹿村の耕宅図は、廣大資料と斐川町資料の両者にみられるがまったく同一の様式であり、差出図と控図が共通した作製段階を経たことが知られる。

島根県において県が示した耕宅図の凡例については、「実地調心得要領追加」の「図中色分け」^{?)}によって具体的に判るが、本郡においても他の郡と同じく統一的な様式となっている。しかし、絵図そのものに描かれる地目には、壬

申図と同じく石新田、反新田などがある。また、山野図は廣大資料の直江村にしか凡例がみられないが、この凡例は、文字で色と地目を示しており耕宅図と同様に壬申図の様式を踏襲した面がみられる。

小字は耕宅図には壬申図と同様に、絵図の余白に地番との関係を示すものがある。これまで検討してきた郡においては、壬申図の小字は改租図において整理統合された場合が多かったが、本郡はほとんど変化がない。壬申図にみられる小字が現在まで連続して利用されている。

地番は一村通し番号となっている。壬申図においてはすでに一村通し番号になっている村においてはその地番順は同一である。

この他、廣大資料の山野図には、他郡においてみられたと同じ「実地調査了」の印が押され、提出図であることを示している。また、山野図には、郡中惣代をはじめ戸長、同副、用係などの名がみられるが、区の長である戸長は一人で、郡中惣代も戸長から選出されている場合が多いようである。このようなことから、区を単位にした特色がみられるようになったものと考えられる。

おわりに

島根県旧出雲郡の地籍図を悉皆調査方式をとり、その保存状況や様式の特徴を検討した結果、つぎのことが明らかになった。

一、明治期作製の地籍図において貴重な壬申図や改租図は、役場の永年保存文書として保管されるが、多くの場合保存状況は極めて悪い。こうした地籍図は、探索して調査しないかぎりそのまま埋もれたままで、散逸する可能性が高いものと思われる。斐川町役場においても貴重な壬申図や改租図を発見したが保存状態が極めて悪く、早急な措置が望まれるところである。

二、出雲郡における壬申図の様式で最も顕著な特徴は、小字と地番の關係が絵図の余白に書き出されていることである。これまで調査した山間部の郡は、小字が多く狭小で錯綜していたから一筆毎に小字を書くのが多かった。しかし、本郡は平地が多く小字がまとまって広く単純であり、一筆毎に示すべき地番と小字の關係を書き出したものと考えられる。また、地番もこれまでは地目毎の通し番号である場合が多かったが、一村通し番号や、本田、石新田、反新田毎の通し番号などがみられた。ついで、こうした新田の区別は、本郡の特徴ある土地利用を示し、近世的な賃租体系などに裏付けられた土地把握の在り方がかなり影響していることが考えられる。さらには、地租改正に際していくつかの村が合併するが、すでに壬申図の段階において合併する範囲で地籍図が作製されている。

三、改租図は、これまでの郡では壬申図よりかなり統一的な様式がみられ、近代的な地図の要素が強いことを強調してきた。しかし本郡では、凡例を文字で書く方法、壬申図において地番が一村通し番号であった村では改租図においても小字や地番に変化がないこと、石新田や反新田などの表現がそのまま改租図でもみられるものが多いことなどがあげられる。こうしてみると、壬申図の影響がかなり強く改租図にあらわれている。だが、一方では他郡で多くみられた寺社などの絵画的な表現は、すでに壬申図において描写されることが少なく記号化されているものが多い。また、斐伊川下流にあって新田開発が盛んな当郡の地域性を示す本田や石新田、反新田などの地目は、壬申図にとどまらず改租図にまで認められる。これまでの調査では、能義郡において山間地の地域性を示す「木の実」の地目が地元に残された控図にはみられるが提出図には一部がみられなくなっている。また、能義郡のみにみられる「菓木」の地目は控図にみられるが提出図には記されていない⁽⁸⁾。

こうした近世的な租税に裏付けられた地域性を示す地目が郡によって壬申図や改租図で異なって表現されていることは、近世絵図と現代地図の狭間に位置する明治初期に作製された地籍図の特徴をよくあらわしている。このような地籍図は、地租改正事業の半封建的な性格をあらわしたものとみてよからう。また、地籍図の地域的な特徴は、郡や

区における地租改正事業の具体的展開とその特徴に関係しているものと思われ、その実態を明らかにする研究がより一層求められるように考えられる。

〔付記〕本研究に当たっては、広島大学附属図書館および島根県斐川町教育委員会の方々のご協力を得た。調査に行し、援助を頂いた佐賀大学助教授五十嵐勉氏と共に深く感謝する次第である。

なお、本研究には、平成六年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）「近畿・中国地方における地籍図類の歴史地理学的活用に関する総合的研究」（代表者小林健太郎 課題番号〇六三〇一〇八六）の一部を使用した。

註

- (1) a 桑原・磯永・磯西・政岡・田村「島根県能義郡の地籍図とその活用」『佛教大学大学院研究紀要』第一七号、一九八九年。b 桑原・磯永・斎藤・関谷・村上「島根県仁多郡における地籍図とその活用」『鷹陵史学』第一六号、一九九〇年。c 桑原・磯永・岩間「島根県伯太郡の地籍図とその活用」『鷹陵史学』第一八号、一九九二年。
- (2) 前掲(1)c七七ページ。
- (3) 磯永「村絵図から地籍図へ——大久保村を事例にした時系列的分析——」（宇治市歴史資料館平成元年度年報）や前掲(1)cで分析を試みた。
- (4) こうした開発過程については、斐川町教育長の杉谷光昭氏にご教示を頂いた。記して感謝したい。
- (5) 前掲(1)b一六五頁、c九一頁。
- (6) 前掲(1)c八二頁。
- (7) 『地租改正ニ関スル令達』所収。前掲(1)bの一五四—一五五ページに全文を載せている。
- (8) 前掲(1)c八三頁。

